第40号 崋山会報
平成30年6月1日
公益財団法人崋山会

『毛武游記図巻』における「観音山から見た足利の町図」

史跡足利学校事務所長 大澤伸啓

足利は下野国南西部、関東平野の端に位置し、市街地の三方が山に囲まれる。渡辺崋山は、天保二年（一八三一）一〇月、妹・茂登の嫁ぎ先・岩本家がある桐生を訪れ、隣町の足利を訪問した。この時の記録が『毛武游記』並びに『毛武游記図巻』（常葉美術館蔵）である。

一〇月二二日には足利学校を訪れ、孔子像の胎内銘や古い書籍等を調査した崋山は、翌二三日の早朝、宿泊先の蔦屋を出て近くの観音山に登った。蔦屋は、足利町の西山麓、桐生方面から二重坂と呼ばれる峠を越え、足利町に入ったところにあった。観音山は、この道沿い、今福村との境にあり、子安観音を祀る観音堂が中腹にあることから付けられた名称である。

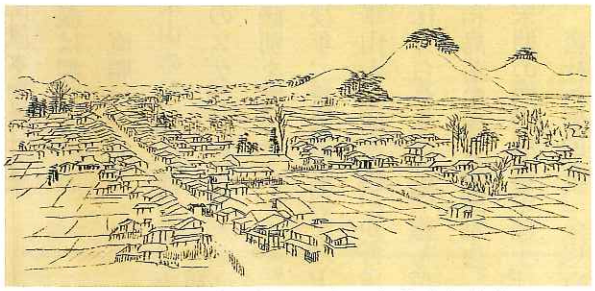
この早朝の観音山行について崋山は、『毛武游記』の中で次のように記している。

「…人々はよく寝たれば、ひとり筆とすゞりとを持出て、観音山にのぼる。此山は桐生のかたよりいたれば、宿に入んとせる處にて、眺望一郷を見わたさる。人家鱗のごとくならびたちて、かすむばかり、雲静なれば、朝のめしたくけむりはたすじも三十すじも、いはゞしづの女のさらせし布を、梢にわたしたらむやうにて、はた山をいづるのからすの五つ六つ、むらがりつゝ行さま筆につくしがたし。此地の地勢をうつしとりて、やどりにかえる。」

この時「うつしとった」画が、『毛武游記図巻』の中で従来より「大間々の町図」とされていた町の俯瞰図である。この絵について筆者は、かねてより足利の町ではないかと思っていた。しかしながら、どこからどの方向を描いたか確証がなかった。そのような折、『『毛武游記』に沿って崋山と歩く桐生と周辺の旅』を刊行された渡辺崋山と歩く会代表の岡田幸夫さんから、観音堂から見た足利の街ではないかとの指摘を受け、一緒に確認に行った。見た瞬間、ここから描いた画であるとの確証を得た。このようなことから崋山と歩く会の本の「正誤表」に「足利の町図」と記されたものである。

写真のように、観音堂前から見る足利の街はこの絵とよく似ている。右側に連なる山は浅間山と坊主山で、左側には東方へとまっすぐ伸びる街道（足尾道）が描かれる。街道沿いには崋山が表現するように「鱗の如く」人家が並んでいる。町場入口の中央には惣門が描かれる。二重坂は町の西端からやや南に向かい切通しをぬけるが、手前右側の家がやや外開きに描かれていることからも、この先で道が曲がることが表現されている。崋山が宿泊していた蔦屋は、この絵の一番手前、右端が描かれていない家にあたると考えられる。

以上、『毛武游記図巻』の中でかつて「大間々の町図」とされていた画が「観音山から見た足利の町図」であること、その根拠となる観音堂から見た足利の写真を示した。足利に宿泊して2日目の早朝、しかも短時間のうちに描いたと想定されるが、崋山の正確な描写力に驚くばかりである。



渡辺崋山筆毛武游記図巻　常葉美術館蔵

父定通の辞世と霊前に届いた弔詩の紹介状

別所興一

崋山の父渡辺市郎兵衛定通は、文政七年（一八二四）八月に六十歳で病没した。長い間の持病が一家を苦しめたことは、崋山が天保九年（一八三八）に家老職の辞職を願い出た『退役願書稿』に詳しく記されている。

一年後の文政八年に崋山は、父の同職だった田原藩家老間瀬九右衛門の嫡男弘人（当時はまだ部屋住み身分だった崋山の友人）に宛てて、わが父の霊前に貴君の父上から弔詩をお供えいただいたことにつき、遅ればせの礼状を届けている。その礼状には父定通自身の辞世や父の知友から霊前に送り届けられた詩歌をまとめて書き上げたものを、故人をしのぶよすがとして書き添えている。

最初に定通の辞世の歌を紹介するが、その詞書を現代語訳すると、次の通りである。

私は六月十六日に病が重くなり、危地に立たされました。水も穀物も断って十日になり、わが子や老妻も薬を求めるのを中断しています。人の命を決めるのは天であり、医者ではありません。

むかしより此世はゆめとさだめつ
もまことのかどで（門出）
うつゝ（現）なりけり

次に定通の知友が定通の霊前に供えた弔詩（詩歌の色紙）を、読み仮名を添えて紹介したい。

渡辺甲斐守輝綱①

老（おい）が身に老のワかれ（別れ）
をおも（思）ひやる
そで（袖）さへふかき秋の夕露

甲斐守は三千石の旗本で、後年浦賀奉行になった。

山口相模守直温②

たれ（誰）をま（待）つさかりな
るらんな（亡）き人ハかえ（帰）
らぬ野辺の秋萩の花

四国宇和島藩関連の旗本の系譜に詳しい谷有二氏の『御旗本物語』（未来社）によれば、直温は翻刻者の誤記で、直勝が正しい。直勝は後記の山口煥⑦の紹介で崋山の面識を得て、崋山が四州真景のスケッチ旅行に出かけた際には、餞別を贈っている。それだけでなく後年、次男の亀三郎に短期間ながら崋山から四書の講義を受けさせたと伝えられる。亀三郎はその直後、宇和島藩主伊達家の養嗣子となり、幕末期の開明的な藩主伊達宗城として、蛮社の獄を脱獄した蘭学者高野長英を藩の洋学顧問として密かに招聘している。また、守旧派の元彦根藩主で大老に就任した井伊直弼に対抗して、薩摩藩の島津斉彬らとともに一橋派の重鎮として活躍し、安政の大獄で処罰されたことでも知られる。崋山の開明思想の継承者の一人とも言えよう。

屋代太郎弘賢③

千代ませといの（祈）りしかひ（甲
斐）もな（無）か秋にながら（永）
きワか（別）れと成（なる）ぞ悲
しき

目次

題字「崋山会報」元崋山会理事 故小澤耕一氏
P①『毛武游記図巻』における「観音山から見た足利の町図」 大澤伸啓
P②父定通の辞世と霊前に届いた弔詩の紹介状 別所興一
P②目次
P④渡辺崋山『毛武游記』⑰
P⑧渡辺崋山『客坐掌記』⑬
P⑫視察 鷹見泉石のふるさと ～古河市
P⑭崋山の田原行（二十四）
P⑯公益財団法人崋山会 田原市博物館 からご案内

屋代は幕臣の国学者で、『古今要覧稿』の編集などで著名。

津田勘太郎景彦④

あま（天）か（駆）ける魂（たま）のありカハしら（白）雲の雲ゆく月もをし（教）へやハせじ

津田は明石藩士の文人。崋山の『寓画堂日記』にもその名が見え、大蔵永常の『門田の栄』の序文も執筆している。

くま子⑤

とし（歳）月をいつ、（何）の道のをしへ（教え）草ワ（分）けつ、い（逝）にし人ぞこい（恋）しき

くま子は津田夫人らしい。

その後に三宅昭定⑥という藩主家の分家筋の不詳人物が七言絶句の弔詩を供えているが、その大意は次の通りである。

かつて天意に耳を傾け、年が経ることを愛惜した。一体どうして知友に諮って訃報を伝えられようか。一夜秋風が吹き続け、止むことがなかった。孝行な子が誠心に達することは、むなしく果たせずに終わった。

崋山二十三・四歳ころの日記の『寓画堂日記』や『崋山先生謨録』にしばしばその名が見える山口勘兵衛直温（山口煥⑦）は、前記の相模守②の本家筋にあたる旗本である。当時直温は二千五百石の将軍御使番で、崋山の友人知己の中で最も身分の高い階層に位置していた。一方の崋山は、江戸版文人画家番附の第二十七位に「花山のほり（登）」と掲載されて画壇に登場したものの、田原藩の財政困窮による俸給削減のため、病人をかかえた十一人家族の崋山一家の手取りは十四石に過ぎず、貧困を極めていた。直温は崋山の画才に大きな期待を寄せるとともに、崋山一家の境遇に同情して、古画の模写を依頼するなどパトロン的役割を果たしていたようである。上級旗本にとって、書画の鑑賞は大切な教養の一つだったからである。

その直温が弔詩として供えた七言絶句を意訳すると、次の通りである。

秋霜は冷たく寒く、しばしば魂を驚かす。筆墨は遺愛の書物に空しく留まる。三年間寝たきりの人を介護したことは、どんな報いをもたらすか。名を天下にあげて家門を輝かすことになる。

崋山の病父に対する尋常ならざる介護に感服し、その将来への期待を物語ると言えよう。

谷文五郎文晁⑧

蝉さへもお（惜）し、と鳴（く）や秋の風

文晁は崋山の師事した江戸文人画の重鎮。崋山はそのアトリエ写山楼で多種多彩な画技を学ぶと共に、多くの友人を得た。

あさ子⑨

をとづ（訪）れて萩をとろかす日暮かな

あさ子は文晁の後妻阿佐子。

太白堂孤月⑩

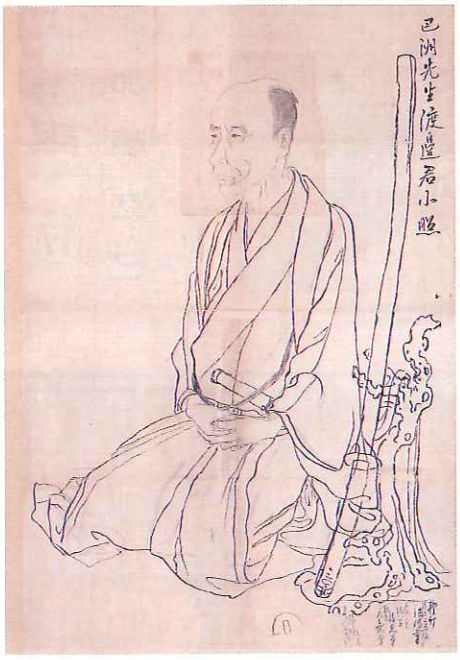
きのふ（昨日）よりけふ（今日）のした（慕）ハし露の秋

孤月は崋山の俳諧の友太白堂八世江口孤月。

最後に崋山自身、「不肖子　定静（崋山の諱）」と記名して次の弔歌を書き添えている。

かぎ（限）りなき親の恵をふじ衣（麻布の喪服）かぎ（り）あるこそうら（恨）みなりけれ

定通は経学を学ぶと共に、漢詩や俳諧にも遊んだ。性剛直にして阿諛せず、文化五年（一八〇八）に家老職に就任した。この書状は、父定通の交友の広さと崋山の育った知的な環境を物語る資料の一つである。



崋山の描いた定通の遺影

渡辺華山『毛武游記』⑰

研究会員　加藤克己

他郷木綿機皆用平機、唯足利用高機、与織帛者無別也。其梭不甚大、一握可斂。用時小梭投却。較大梭為最便。而布面其平暢可喜。吉貝擬織最佳。

天保二年（一八三一）十月二十二日続き

他の郷では木綿の織機は皆、平機を用いるけれど、足利だけは高機を用いる。絹織の場合と違わないのである。その梭はあまり大きくはなく、一握りで通すことができる。時に小さな梭を用いて投げ返す。大きな梭と比べてたいへん便利である。そして、その布面がなめらかなことが喜ばれる。吉貝擬織が最もよい。

※ **平機、高機**　ともに手織機だが、高機の方が丈が高く、構造、作用が進んでいる。12回（第35号）参照。

※ **梭**　緯糸を梭口に通すための機織用具。12回（第35号）参照。

※ **斂**　おさめる。おさまる。

※ **却**　しりぞける。おしかえす。

※ **平暢**　でこぼこなくよくのびて。

※ **吉貝**　サントメ（桟留）。インド南東部、コロマンデル海岸地方のこと。聖トマスが布教に来たという伝説がある。

※ **吉貝擬織**　サントメから渡来した綿織物を模造した織物。

三河でも吉貝擬織が

吉貝擬織は足利だけではない。この年から三年後の天保五年（一八三四）から同十一年まで田原藩に仕え、さらに弘化元年（一八四四）から同三年まで浜松藩に仕えた大蔵永常は、その著『広益国産考』（岩波文庫）において、「尾州・三州・遠州辺にて織出す所の桟留縞とよべるもの……益を得る事少なからず」と述べている。

足利為戸田大隅守知所。当先君忠高公時、求官賂権門、収斂最甚、民窮国危。公憤然悔悟曰、夫士大夫得官固有命可以待也。時士賂権重秤以迎豈其道乎。況学不優才不足者、求之東走西奔、贈問金幣、折士禄、厚税斂、国家衰耗不自知。嗚呼惑哉、吾誤矣々々々。終断然断意於官曰。其家不斉治国者否矣、況乎天下者乎。自是以病不朝三年、致力於民。国大興、今已四十年、郷無貧民、凶年必賑恤、豊歳亦不斂、故上無滂克、下無奸民、可謂善治也。

戸田家陣屋跡　足利市雪輪町一帯。

足利は戸田大隅守の治める所である。先代の主君忠喬公の時、官職を求めて権力者に賄賂を贈った。そのため、税の取り立てがたいへん厳しくなり、民が窮迫して国が危うくなった。忠喬公はそこで自己の非を悔い悟って言った。「士大夫が官職

を得るのはもとより運命にあるので、それを待つべきである。時に武士が権力者に賄賂をたびたび贈り、それでもって官職にありつこうとするのは、その道であろうか。いわんや学問に優れず才能の不足する者がこれを求めて東奔西走し、金品を贈り、自分の家禄を分けて提供すれば、税率を高くして国を衰耗させることを自分では知らないでいる。ああ惑えるかな、私は誤っていた。私は誤っていた。」ついに断然として官職を得たいという気持ちを絶って言った。「その家を整えないで国を治める者はいない。ましてや天下を治めることなどできはしない。」これにより、病気と称して三年間出仕せず、力を民生のために尽くした。国は大いに富み、今すでに四十年になる。郷に貧しい民はなく、凶作の年には必ず貧しい者や災害に苦しむ者に恵み、豊作の年にはまた取らない。そのため、上に搾り取って潤う者はいなく、下によこしまな民はいない。りっぱな政治というべきである。

※ **戸田大隅守** 下野足利藩六代藩主戸田忠禄。一七九七―一八四七。文政四年（一八二一）、父忠喬の隠居により家督を継承した。

※ **知所** 知行する所。治める所。

※ **先君忠高公** 足利藩五代藩主戸田忠喬。一七六四―一八三七。父の死去により、安永四年（一七七五）家督を継ぐ。文化十二年（一八一五）、御定書五箇条を制定して、藩財政の緊縮や倹約、貯蓄の奨励を行った。本文に記す忠喬の功績は、崋山が田原藩主三宅康直に対して最も言いたかったことであろう。

※ **賂** まいない。賄賂を贈る。

※ **悔悟** 過去の非を悔い悟ること。

※ **士大夫** 人格が優れ高い官職についている人。

※ **命** 回り合わせ。運命。天命。

※ **重稗** 米などの物資を繰り返し贈与すること。

※ **東走西奔** 東奔西走。

※ **折士禄** 自分の家禄を分けて提供する。

※ **税斂** 租税を取り立てること。税の徴収。

※ **衰耗** 衰えて勢いがなくなること。また、衰え弱ること。

※ **矣** 語句の末に使う助字。直接読まない字（置き字）。断定の意。

※ **其家不斉…** 中国、前漢時代の五経の一つである「礼記」の「大学」に、「修身、斉家、治国、平天下」とある。

※ **不朝** 本来は朝廷に出仕しないことを意味する言葉だが、ここでは幕府に出仕しないこと。幕政初期なら許されなかったが、この頃はこうして藩政に専念することができた。

※ **賑恤** 貧困者や被災者などを援助するために金品を与えること。

※ **渟克** 貪り取って自分が潤うこと。

※ **善治** よい政治。善政。

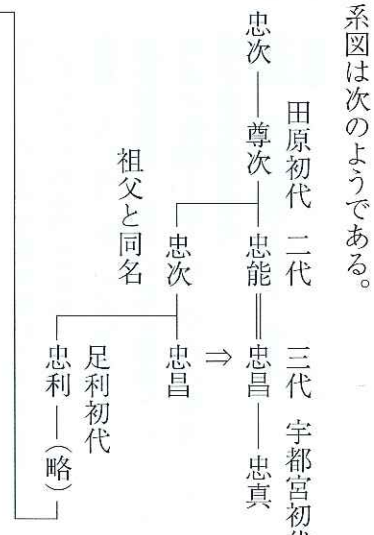
田原と足利藩

初代田原藩主戸田尊次の孫にあたる戸田忠利（忠時）は、伏見奉行などを勤め、甲府において八千石を領していた。宝永二年（一七〇五）、加増を受け、下野国足利・河内・都賀三郡のうちで一万一千石を領することとなった。大名に列したわけだが、新規の城郭を作ってはいけない時世になっており、城は作らず、陣屋を足利雪輪町におき、以来相承して明治に至った。

なお、忠利の兄忠昌は、伯父の養子となり田原藩一万石の藩主となり、寛文四年（一六六四）肥後国天草に転封、後に関東へ移り、元禄十二年（一六九九）没した時は下総国佐倉城主七万一千石。忠昌の子忠真が宝永七年（一七一〇）下野国宇都宮へ移った。

それで、足利藩は宇都宮藩の支藩というが、分領ではない。また、支藩の方が本藩より先に下野国へ入っている。

系図は次のようである。



公当為仁政、中村孫兵衛者頗有功云。治所在街東、堵墻繚繞、一小荘也。吏十名。公帰休、十年僅一回云。

忠喬公が仁政を行うにあたって、中村孫兵衛という者がたいへん功績があったという。

陣屋は街の東にあり、垣根がまつわり巡っており、一つの小さな屋敷である。役人は十人。忠喬公が帰り休んだのは、十年間にわずか一回だけという。

※ **仁政** 恵み深い、思いやりのある政治。

※ **中村孫兵衛** 本文にある以外不詳。

※ **治所** 陣屋。

※ **堵墻繚繞** 前号参照。

※ **荘** 一つの区画。屋敷。

学校在二街ノ東南ノ隅一、即僧院也。戊寅ノ回禄ノ後、不レ複レ故。院北即聖廟。々有二二門一、一ハ獲レ廟ヲ名ヲ曰ヒ杏壇ト、篇ノ明ノ蔣龍渓ノ所ヲ一レ書。一ハ迸レ在リテ二街頭ニ一名ヲ曰ク入徳門ト。廟ハ皆瓦甍、以テ□ケヤキヲ搆ヘ、不レ用ヒ土ヲ。階五級、正面ニ掛ケ簾ヲ、々後ニ有リ木室、設ク碧幃ヲ。排レ幃ヲ、即チ聖像。伝ヘ云、以テ迦羅木ヲ製ストヲ之、不レ知ラ就ニ一レ之ヲ審。古色不レ可カラ状ス、木製ニシテ裏ニ布ヲ而漆ス。

学校は街の東南の隅にあり、僧院の中である。戊寅の年（注参照）の火災の後、旧に復していない。僧院の北はすなわち聖廟である。聖廟に二つの門がある。一つは廟があって、名づけて杏壇門といい、明の蔣龍渓の書（注参照）になる扁額がかかっている。もう一つは街頭にあり、名づけて入徳門という。廟は皆瓦屋根で、ケヤキで作られており、土を用いない。階段を五段上がると正面に御簾が掛けてある。その後ろには木の部屋があり、青色の垂れ幕がある。垂れ幕を押し開くと聖像がある。言い伝えによると、聖像はキャラの木で作られているというが、これについては詳しいことは知らない。古びていて、元の状態がわからない。木製で、布の裏に漆が塗ってある。

足利学校の学校門

※ **即僧院也** 前号掲載の図では学校と僧院は別の所にあり、「学校はすなわち僧院」という表現には違和感を持つが、華山が訪れた時は仮住まいであったため僧院の中に学校があったのだろうか。

※ **戊寅** 文政元年（一八一八）にあたるが、その年の火事は足利学校から約一km北西にある徳正寺が焼けたものであり、足利学校が類焼したとは考えられない。約九カ月前（天保二年正月）の足利学校が焼けた火災を先に「寅冬」としていたので、これのことか。

※ **回禄** 火の神。転じて火災のこと。

※ **院北即聖廟** 僧院の北に聖廟というのは前号掲載の町図と違うが、学校の敷地の北部に聖廟があるのは事実。

※ **聖廟** 孔子を祀った堂。聖堂。

※ **杏壇** 孔子が弟子たちを教えた所にアンズの木が植えられていたことに由来するという。

※ **篇** 扁額にする。

※ **蔣龍渓** 明代の画工で、山水をよくした。なお、実際には杏壇門と入徳門の間にもう一つ学校門があり、前沢輝政著『新編足利の歴史』によれば、蔣龍渓が書いたのは学校門の扁額である。次ページの「聖廟周辺図」および「実際の門の並び」を参照。

※ **迸** 走って。

※ **搆** かまえる。つくる。「構」に通じる。

※ **級** 階段。

※ **碧幃** 青色のとばり。

※ **排** 「押し開く」意か。

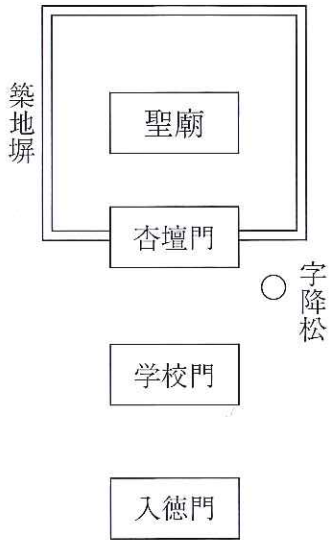
※ **迦羅**（きゃら） インドの香木の名。沈香（ジンチョウゲ科の常緑きょう木。熱帯地方の産）の別名。

※ **裏布而漆** 本文にあるように、聖像は安置されており、その前に青色の垂れ幕があり、裏の布に漆が塗ってあることなど普通はわからないはず。この後の本文を読み進めていくと、華山たちが聖像を取り出して調査した顛末が記述されている。

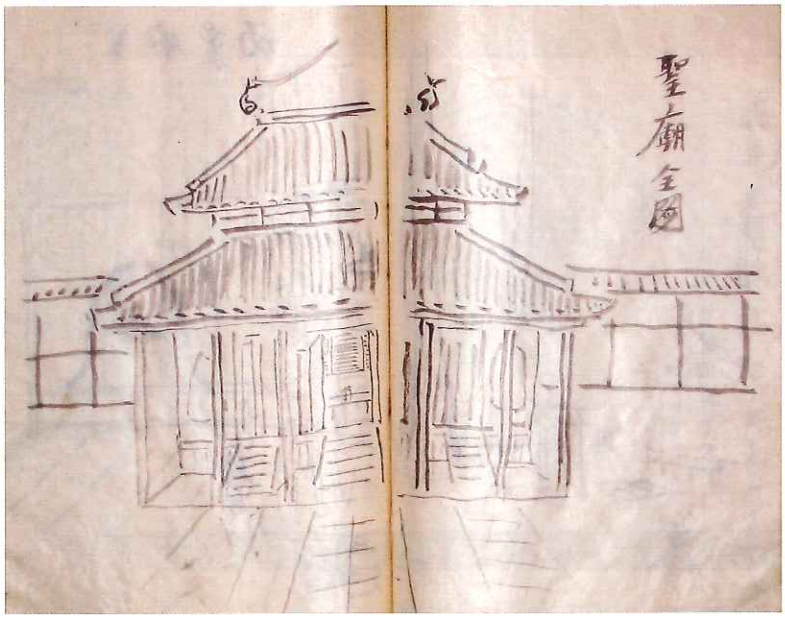
聖廟周辺図

図中に、聖廟、杏壇門（きょうだん）、入徳門、字降松枯株（かなふりまつ）、八幡祠、とある。

実際の門の並び



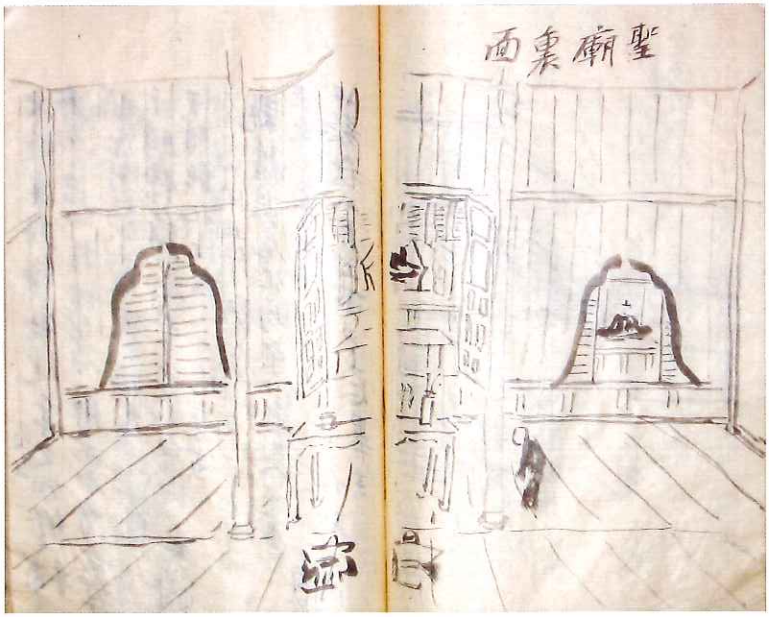
聖廟全図



聖廟裏面図

「裏面」とあるが、南正面から内部を見て描いたもの（史跡足利学校事務所より御教示頂いた）。「裏」には「内部」という意味もある。

聖廟は、正面に孔子坐像、向かって右側に小野篁（たかむら）坐像を安置している。篁は足利学校の創設者と考えられたためであろう（足利学校の創設については諸説あるが）。



（続）

田原市博物館所蔵品から　渡辺崋山筆『客坐掌記（天保九年）』⑬

（図　人物像）

隆能画
法橋豊泉源孝之
為家卿書
讃州綾松山白峯寺
○海昌李因　花卉三幅中懸幅款
昻珍
是庵
李因
按是庵ハ李因ノ別号　昻珍ノ号諸伝所見ナシ　史ヲ補フヘシ

弱竹物語　「鳴戸中将物語」、鎌倉前期の短編物語。（国書総目録・⑥　285）「なよ竹物語絵巻」一軸、伝藤原隆能画、伝藤原為家詞書、「絵草紙或なよ竹くれ竹」、香川白峯神社蔵本写一冊（東大史料）。

隆能　藤原隆能　生没年不詳　権中納言藤原清隆の男、正五位下、絵所預、「源氏物語絵巻」の作者ともいわれる。（国書人名・④219）

為家　藤原為家（一一九八～一二七五）藤原定家の嫡男、権大納言、「洞院摂政家百首」「新撰六帖題和歌」。（国書人名・④222）

法橋豊泉　高井豊泉、名は孝之、字は子本、京都の人、文政頃の人、『平安人物志』に掲載。

讃州綾松山白峯寺　香川県坂出市青海町、綾正山洞林院、真言宗御室派、白峰（シロミネ）山の山頂北側、空海・円珍の開創という、崇徳天皇陵がある。

海昌李因（一六一〇～一六八五）、女、銭塘（杭州）人、字今是、又字今生、号是庵、又号龕山逸史、海寧葛微奇妾、画得陳淳法、多用水墨、蒼老無閨閣気、亦工芦雁。（中356）

（図　蘇鉄）

堺　大安寺*

二条与力*須貝藤助*大雅大幅寄蔵

（図　山水）

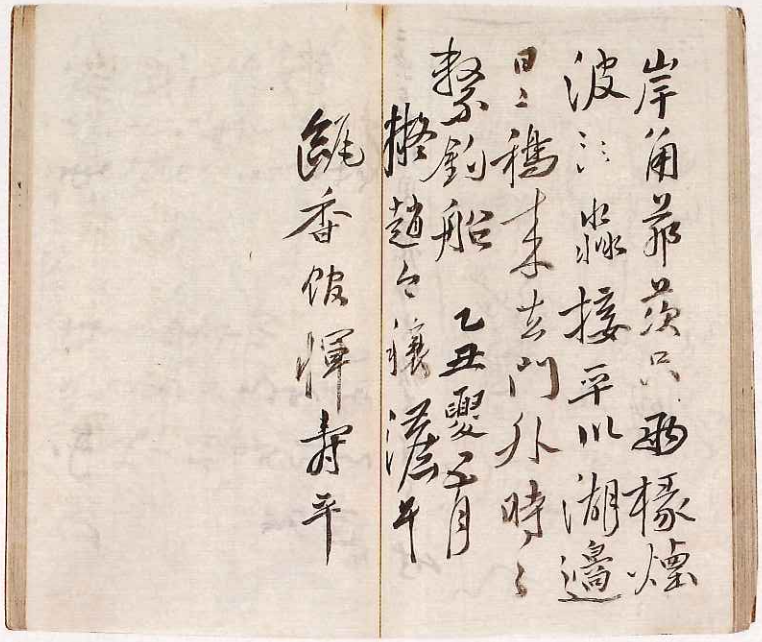
大安寺　臨済宗東福寺派、堺市境区南旅竜町、応永元年（一三九四）徳秀士蔭開創。

二条　二条斉敬（一八一六～一八七八）公卿、関白、公武合体論に終始した。

須貝藤助　未詳

大雅　池大雅　11頁左　参照。

田原市博物館所蔵品から　渡辺崋山筆『客坐掌記（天保九年）』⑬



岸角節茨只雨椽、煙
波々淼*接平川、湖辺
日々槝来去、門外時々
繁釣船、乙丑夏五月
摭*趙公　穰*澹牛

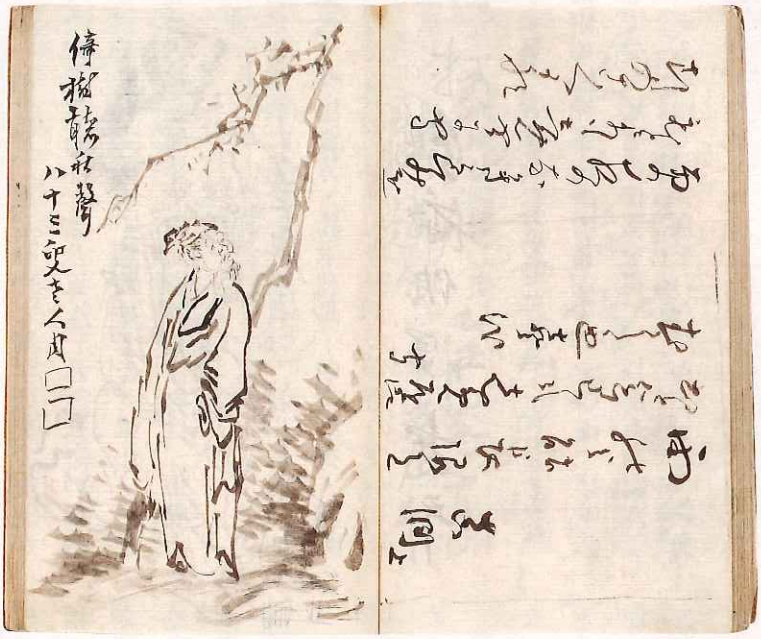
甌香館　　惲*寿平

淼　渺々

摭趙公　未詳

穰澹牛　未詳

惲　寿平（一六三三～一六九〇）、初名格、字寿平又字正叔、号南田・白雲外史、武進（江蘇常州）人、家貧、不応科挙、詩格超逸、善山水、花竹、禽虫、所居有甌香館、有甌香館集。（中・１０７２）



上

真淵*

雨*のよの　長恨を
ひとときも　しめやかに鳴
むしの声哉

雨の夜の　なかきうらみを
つねよりも　しめやかに鳴
むしのこへかな

（図　人物）

倚樹聴秋声
八十三叟老人図

真淵　賀茂真淵（一六九七～一六六九）姓岡部、名政躬・春栖、号県居、京都賀茂新宮の祢宜、岡部長衛門定信の子、遠江国敷知郡伊場村の生、京都で荷田春満に国学を学び、のち江戸で田安宗武に仕え、国学・歌学を講じた、門下に本居宣長・村田春海・荒木田久老ら、著「祝詞解」、「万葉解」、「冠辞考」。（国書人名・①５１９）

「あめの夜の　なかきうらみを　つねよりも　しめらかになく　むしの声かな」「賀茂翁家集」巻之五、〔岡部〕日記或は東帰といへり」所収。（賀茂真淵全集・㉑　３６９）

平成二十九年度崋山・史学研究会研修視察
鷹見泉石のふるさと～古河市

本年度の研修視察は、十月八日（日）九日（月・祝）の一泊二日、渡辺崋山と蘭学研究で交流があった鷹見泉石（一七八五～一八五八）のふるさと、茨城県古河市を訪ねました。崋山・史学研究会の視察研修で古河を訪ねるのは、平成十六年以来、三回目となります。

当日豊橋駅に集合した会員は、石川洋一・加藤克己・柴田雅芳・鈴木利昌・中神昌秀・別所興一の六名で、午前八時四十六分発のひかり号に乗車し、東京からはＪＲ宇都宮線で十一時四十五分に古河駅に到着しました。ここで、中村正子会員と合流し、合わせて七名となりました。駅構内の観光案内所で市内のパンフレットを入手して昼食場所の情報を得て、以前も訪ねたことのある境屋で、昼食をいただきました。昼食後は、まず荷物を宿泊するホテル山水に預け、古河城出丸跡に建つ古河市歴史博物館へ向かいます。鷹見泉石の重要文化財が常設展示されている館内を学芸員の永用俊彦さんに案内していただきました。展示室1は「鷹見泉石と洋学」、展示室2は「古河の歴史」、展示室3では、茨城県近代美術館移動美術館が開催されています。

次に、博物館入口の向かいにある鷹見泉石記念館を訪ねます。泉石最晩年の住居を改修し、公開しています。記念館には、ボランティアガイドの方がいます。この建物は古河城の余材で建てたと伝えられるもので、邸内には、古河市指定文化財・天然記念物「楓樹」や古河城二ノ丸御殿にあったと伝えられる石灯籠や史蹟「鷹見泉石邸」の碑があります。さらに記念館の西側奥には、奥原晴湖画室繍水草堂があります。以前の視察研修時には、まだ公開されていなかったもので、明治二十四年（一八九一）に埼玉県熊谷に建設された画室をこの地に移築復元したものです。

鷹見泉石記念館を出て、お堀に沿って右に進み、なだらかな坂を下ると古河文学館があります。古河ゆかりの作家として、児童向けの絵雑誌『コドモノクニ』を創刊した鷹見久太郎の資料や歴史小説家永井路子佐野の展示を見学した後、左方向へ石畳の道路を徒歩で、篆刻美術館と古河街角美術館の間の道を抜け、左へ進み、古河市名誉市民の永井路子旧宅へ向かいます。前回の視察研修でも見学できたのですが、東日本大震災で被害を受け、修復補強工事後、平成二十四年に再開館したとのことでした。永井さんの幼少期からの写真や経歴も展示され、住んでいた当時に近く復元されて、古い商家のおもむきを残しています。旧宅の案内をしていただき、庭園も見学させていただけました。夕刻も近づいてきましたので、今夜

古河市歴史博物館

永井路子旧宅

の宿を目指します。

宿泊先は、古河市では常宿としているホテル山水です。ホテルの前は杉並通りと呼ばれ、武家屋敷の面影を残す、古河市を代表する景観としてよく紹介されている場所です。夕食は、ホテル内にある「れすとらん杉並」で取ります。

第二日目は、まず古河公方公園を目指します。ホテルからはタクシーを利用します。管理棟前で降り、公園内にある国指定重要文化財の旧飛田家と茨城県指定文化財の旧中山家を見学します。飛田家は、常陸地方によく見られた曲がり屋形式の農家で、中山家は、武士から帰農した家で、辺田村の組頭などを勤めた旧家です。直屋といわれる型です。建物の周りもゆったりとしており、管理をしているスタッフの方と話をしていると、ドラマなどの撮影にもよく使用されるとのことでした。鎌倉公方足利成氏が鎌倉を離れ、一四五五年、古河に館を構え、以降、古河公方と呼ばれ、五代百三十年にわたり、北関東に一大勢力を誇りました。茨城県指定文化財史跡古河公方館址石碑の周辺の土塁などに当時の雰囲気を感じさせてくれます。

古河公方公園内の旧中山家

古河公方公園内の旧飛田家

古河公方館跡石碑

その後、タクシーで市内に戻り、前日に回れなかった古河第一小学校北にある鷹見泉石生誕之地碑を確認し、泉石の墓所がある横山町三丁目の正麟寺を訪ね、古河市指定史跡となっている鷹見泉石の墓と鷹見家一族の墓を見学し、ホテルに戻り、ホテルの西側の大手町にある土井家の菩提寺である正定寺を回ります。境内には、平成元年に建立された徳川家康・秀忠・家光に仕えた土井家初代の利勝公御像が建立されています。土井家墓所は、元東京浅草の誓願寺にあったものが、関東大震災のため、昭和二年（一九二七）に、古河市のこの寺内に移されたもので、古河市指定史跡となっています。四代将軍家綱の母、お楽の方の墓もあります。また、正定寺黒門は、本郷にあった旧土井家江戸下屋敷の表門を移築したもので、古河市指定文化財・建造物となっています。昼食後、古河駅で解散し、それぞれ帰路へ向かいました。

鷹見泉石生誕之地碑

研究会員　鈴木利昌

崋山の田原行（二十四）

『全楽堂日録』の日記にあたる部分は、前回までに紹介した二月二十二日の「**加地山の峰に登り御領の内をのぞむ。浦、吉湖のわたりより大久保、高松のわたり迄見渡さる。**」で終わり、次のページからは十ページにわたり、覚え書きのようなことが書かれています。崋山がこの覚え書きをいつ、そして、どういう順序で書いたのかは不明です。

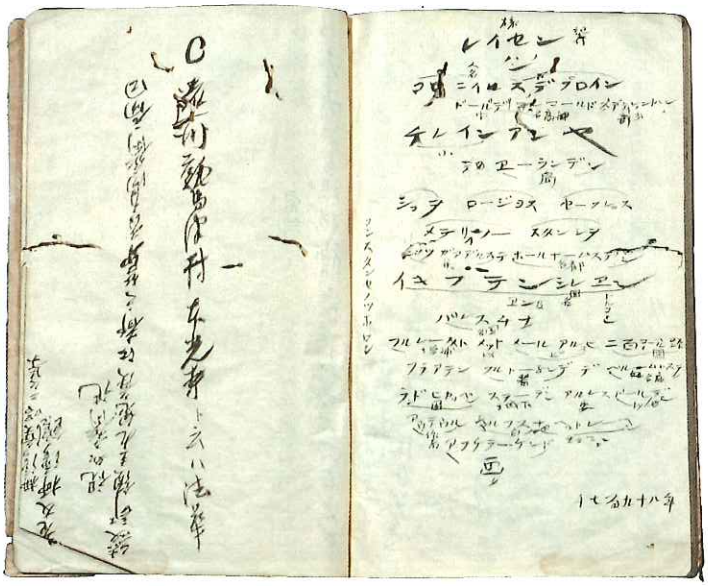
ただ、数の多いページ（例えば十ページ）から書いていったと思われるところはあります。

例えば、覚え書きの九ページ目には、

○武州児玉郡蛭川村花井章左衛門

○武州荒川附（児玉郡が消してある）**瓶尻**

と、『訪瓶録』の旅（天保二年十一月七日から十二月三日）での覚え書きと思われる記述があります。そして、それより前の三ページ目には、天保三年以降のものと思われる覚え書きがあるからです。それが、写真にある『レイゼン』という旅行記についてのメモです。これは、崋山が江戸にいる天保三年八月二十四日の『全楽堂日録』に、



御下やしきへ至り巣君を拝し奉る。君にデブロインのあらはせるレイゼンといふ書二巻を借て奉る。これハ、デブロイン地中海諸国交易せし旅日記にして、都留格、厄入の地方ヲ書せしものにて、ことに都留格の都の図、いとめづらかなり。

とあるように、三宅友信から借りた本を小関三英あたりに読んでもらったことの聞き書きと思われます。

これが書かれたのは、借りてからこの田原行に出る天保四年一月二十二日までの間と思われます。

また、二ページ目の最後には、

江戸へ出るハ彦間といふ、すき様ヤ違ふ。

○佐束紙、朝夷村、駿州志田郡田中領、紙漉家五百軒計あり。

という記述があります。これと同様の記述が、天保四年一月二十七日に、

田中領、此処に佐束紙とて大半紙といふ紙めきたるものあり。買ふ。此紙ハ駿州志田郡朝夷奈村より出るとぞ。紙すける家凡五百軒あまりもあるよし。佐束も地名のよしなれど売ものしらず。江戸へ出すものハ彦間とて、漉かたもちがふよし。

とあります。このことから、佐束紙についての覚え書きは、天保四年一月二十七日以降、つまり、前のページほど、覚え書きの内容が新しくなっていると思われます。ただ、四ページ目には、

○遠江鷲津村本光寺ト云ハ法華

と、時間の経過からすると後にあたる鷲津のことが述べられています。これについては、同じ四ページ目に

柳湾漁唱　二集

老友　柳湾館

視如斎記

綾部領主九鬼侯、江都之第有高斎扁曰

と四行が逆さに書かれており、反故としたページであったため、書いてしまったのかもしれません。

また、左から右に箇条書きをしていったと思わ

れるところもあります。一月二十七日には、佐東紙のことを書いて彦間のことを書いていますが、覚え書きでは、逆になっています。彦間のことが書けずに右に書いたと思われます。それは、彦間の項には、箇条書きの「〇」がついていないからです。

さらに、佐東紙の記述の右側には、

〇伊良虞名所記、杉江道雲
〇聖武天皇の時、八王子で南都東大寺瓦を造ル
〇神戸久丸明神ハ吉野の王子也、神主楠九郎太夫

と、田原に着いてからの見聞と思われる記述があります。

このようなことから、覚え書きは、最後のページから書いていったのではないかと思いますが、真相は謎です。

しかし、ちょうど加地山に行ったところの記述で、ページがなくなったのは事実で、その後、崋山一行がその後何をしたか書かれていないのは残念です。

『全楽堂日録』の「客参録」は、以上で終わりですが、崋山は、表紙に「客参録」「天保癸巳二月二十三日」と記した新たな一冊を起こし、『客参録』として、田原での滞在の様子を記していきます。

なお、崋山は、『全楽堂日録』の覚え書きの後の最後の一ページに、

廿三　ケイ拝酌
廿四　御花見
廿五　御花見
廿六　朝西行寺来、臨東橋蘭、風雨
廿七　仁ヵニ至
廿八　石峰、大勢来
廿九　詩、春三、吉田、午後登城
卅日　大崎御供
朔日　西行寺来、又二郎来
二　御便出る

三　登城、格式御加増御礼、霊巌寺午後披召
詩
四　鈴木弥太登城、何右衛門、玄順、二人、
元喜、伊織、謙吉、松山、吹巌翰ハ便
五
六　庄七

と、二月二十三日から三月六日までのことをメモしています。『客参録』に新たに二月二十三日から書き起こしているのに、この二週間のことをメモしているのは、田原では冊子が手に入らず、手に入れるまで二週間かかったということでしょうか。

ちなみに、『全楽堂日録』で「ケイ拝酌」となっている二月二十三日の記述は、『客参録』では、

天保四癸巳余以官事客田原。是二月二十三天晴風雪吹伊織集藩士二十余人為弓箭社。凡為此地以射為会者皆銭賭也。以故学者必鵠不必礼譲破些。唯雪子矯此弊道子弟。然人情愛利不能禁因脩。至此駿遠二国以竜興免小民学射以故其技至鄙汚如此也。射場設宴邀予飲。

となっています。「ケイ拝酌」が傾杯酌なのか敬拝酌なのか意味は不明ですが、記述の最後の「射場に宴を設け予を邀え飲す。」が、これにあたります。

（了）

研究会員　柴田雅芳

公益財団法人華山会
田原市博物館 からご案内

田原市博物館特別展企画展のご案内

七月十四日（土）～九月二日（日）

企画展 豊川用水通水50周年記念～渥美半島の農業の歩みと豊川用水～

（企画展示室）

豊川用水通水以前の渥美半島の農業に係った先人たちが、どのような工夫と努力によって、農業の発展の基礎を作ってきたかを概観する。また、豊川用水通水後の渥美半島の農業がどのように発展してきたかを展示。

赤羽根 豊川用水工事 昭和42年頃

展示解説 七月二十一日（土）・八月二十五日（土）午前十一時

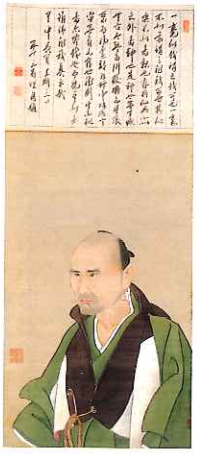
講師：学芸員 山本隆大

同時開催：華椿系の画人が描く水（特別展示室）

九月八日（土）～十月二十一日（日）

特別展 開館25周年記念 渡辺崋山の神髄

渡辺崋山は田原市博物館の展示の核です。今回、その集大成の展覧会として田原市市制15周年・田原市博物館開館25周年を迎える今年に特別展を開催します。全国の渡辺崋山作品の優品を一同に集結し、渡辺崋山が目指した絵画の神髄を探ります。会期中、展示替あり。



重要文化財 渡辺崋山筆佐藤一斎像
東京国立博物館蔵 文政4年（一八二一）

重要文化財 渡辺崋山筆千山万水図
天保12年（一八四一）

展示解説 九月二十三日（日）・十月二十四日（日）田原市博物館 午前11時～ 田原市博物館長鈴木利昌

特別講演会 「饒舌館長、崋山の眼差しを語る」十月十一日（木）崋山会館 午後一時三十分～ 入場無料

講師：河野元昭氏（東京大学名誉教授・静嘉堂文庫美術館長）

田原城跡・月見会 九月二十四日（月・祝）午後六時三十分～

十月二十七日（土）～十二月九日（日）

企画展 田原の美術 平井誠一展～色彩表現の魅力～

詳細はチラシ等でお知らせします。

田原市博物館平常展のご案内

五月十九日（土）～七月八日（日）

渡辺崋山と椿椿山

田原の美術 道家珍彦と白土会・所蔵作品による郷土ゆかりの画家たち

常設展示室では渡辺崋山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

特別展	一般	六〇〇円（四八〇円）
企画展	一般	四〇〇円（三二〇円）
平常展	一般	二一〇円（一六〇円）
	小中学生	一〇〇円（八〇円）

企画展・特別展開催時は小・中学生無料

毎週土曜日は小中高生無料

（ ）内は二十人以上の団体料金

東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポートもご利用ください。

休館 毎週月曜日（祝日の場合はその翌日）、展示替日

（公財）崋山会から
崋山・史学研究会会員募集中

申込場所 崋山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修（年一回）に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館

展覧会・催し物のお知らせ

見学会に参加できます。

博物館だより（年数回）・崋山会報をお送りします。

崋山会報 第四十号
平成三十年六月一日発行
編集発行 公益財団法人崋山会
理事長 鈴木 愿
常務理事 林 勇夫
事務局長 小川金一
〒四四一―三四二一
愛知県田原市田原町巴江一二の一
TEL〇五三一・二二・一七〇〇
FAX〇五三一・二二・一七〇一
編集協力
田原市博物館
崋山・史学研究会
会長 小林一弘
吉川利明 加藤克己
山田哲夫 石川洋一
林 哲志 中村正子
藤城精一 柴田雅芳
中神昌秀 池戸清子

※崋山会報ご希望の方は崋山会館・田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 平成三〇年十二月一日